福濟先生

ロ 9
4120
2

相州大関

門口 9
號 4120
番 2

童蒙教草巻の二

福澤諭吉　譯

第七章　物事ハ心を留め機に臨て變ハ應ずる事

世の中ハ行ても〳〵萬の物事を見て常ハよく心を留るを紀ハ自ハ我身を助るの方便を得べし人たる者の心得置くべき事をバ悉く皆學校ハ於て學んとし或ハ獨て書物を見てこゝを知らんとするハ迚も叶ざることゝあり故ハ我郷の人の氣質を知て世界の事情を詳らかにし處の異なるハ從て風俗の同じからざるを考ふるなど數限りなき物事を

慶應義塾藏書
教育研究所藏書

41 6430

辨別して我身の用を達し世の為を謀らんとするハ日々夜々我目の前ハ見へ我心ハ感ずるものハ氣を付けて思慮を運らさゞるべからず

世の中の人の心ハ推靡て斯る時ハ斯く思ふものなりと其情合ハ通じてこゝを心得居るときハ今我身ハ於ても斯く云ひ斯く為をとうゝバ他人ハこれを見聞して斯く思ふべしと預め先見を定め得べしこゝを人の機轉と以ふ人として機轉きゝざるバ苟ハも同類の人ハ交るを得ず或ハ假令ひこゝハ交るも人並の禮儀を尽さを知らず且又大切なる場合ハ差掛て人の機轉ハ由て大切を成すこと

平生よく物事ハ心を留るの習性とハなるバ危き場合ハ臨て大ハ其功能を見るべし譬へバ漁者漁守ハど平生より近邊の山の形を心ハ覽へ朝夕海の模様雲霞の氣色を察して大風の時ハ預め難を遁るゝ者少うゝて又人の生涯の間ハ種々の難題ハ出逢ふて其取計ハ困ることハなども平生よりて教限もなき些細なる物事ハ觸て胸の中ハ覽る所多けれバ其例を以て此度の難題をも首尾よく取計ふを得べし斯く平生の心掛宜しき者ハ否應の決斷ハ迫るとなれども平氣ハして聯ざるのミあらゝず其時の機ハ應じて施すべき方便を工夫せること甚ざ易し若此方便を施して當らざる

ときハ次の上策を工夫し千變萬化窮ることなく所謂臨機應變の妙ある者といふべし柳臨機應變の才ハ人々の生付ふ由て優劣ると劣るとの別ハいまだ心を用て勉まバ次第ふ上達まべきものなり

(い)「がせんぢ」天文を語る事

「がせんぢ」ハ佛蘭西の大學者なり生まれて四歳の時より既ふよく書を讀み追々成長まるふ及び山ふ登り野邊ふ出で日月又ハ星を眺るを以て樂とせり年七歳の時ふ至てハままく天文を好み或ハ夜中俄ふ起て星月を眺ることふど間いろいろいふ或夜同じ年頃の子供両三人と遊び居たる折しも滿月かゞやきて昼の如く薄き浮雲風ふ吹ろまて月の邊を飛び雲の間ふ月走るが如く又月の前ふ雲動くが如し子供等ハこれを眺め彼の動くものハ月欤雲欤と爭論を起し皆口々ふ動くものハ月なり雲ハ静ふして知を移さまるといひけまバ「がせんぢ」ハ獨り說を定め月も動ろざるふハいろざまども其動くこと目ふ見る程あらず今彼月の動くが如くふるハ全く雲の走るふ由て斯く見ゆるふまと云へど他の子供ハ其道理を聞分けず尚も銘々の說を云張けまバ「がせんぢ」ハ工夫を運らしさらバ此方へ来給へとて大木の下ふ連まて行き其枝の間より窺ましめふ果し

て月ハ同し枝の間ゟ止まりて動かず實ゟ走るものハ雲なり
片意地ゟる子供等も此證拠を見てがせんぢの説ゟ閉
口したりと云ふ

㋟ 亞米利加の土人肉を盗まるゝ事

北亞米利加の土人或日山より其小屋ゟ歸り見るバ柱ゟ戟
て干置きし肉を留主中ゟ盗まるゝたり土人ハ其場所の模様
をよく取調べて盗人の詮索ゟ出戟け森林の中を彼方此方
と徘徊する折柄樵夫ゟ逢ふて尋るゟ今此邊ゟ身の丈低き
年寄たる一人の白人歐羅巴人の種なり短き鉄炮を持ち尾の短き小
犬を連れて通行せざりしやと云ひきバ如何ゟも其通り
の人を見戟たりとの答ゟ土人ハ悦び扨こそ其人ハ我貯の
肉を取りし盗人なり云ふ遠くハ行ずと云ふゟ樵夫等
ハこれを怪み盗人ゟ見覺のゆるべき筈もなきゟ其人の有
様を斯くまで委しく知り給ふハ何故なるやと尋けるバ土
人の云く我ハ立て肉を戟置きしゟ盗人ハ其下ゟ石を積て
踏臺を造りて其丈の低きこと推て知るべし森の落葉の中
を見るゟ其足跡の間狡し老人の徴なり且其足の先を外の
方ゟ踏出せるハ白人の徴なり土人ゟ見バ足を真直ゟ踏む
筈なり又鉄炮を立戟たる木の皮ゟ筒口の痕なりしゟ其筒
の短きこと疑ふし犬の小さきこと足跡を見て知るべー

其尾の短きとハ埃ホ尾の形ヲ付きたるを見て知るべし案ずるホ此犬ハ主人の盗まる間尻を据へ居たるべしと

㊁鼠玉子を取る事

前章の話ホ於てハ蠻野の民たる亞米利加の土人と雖ども よく物事ホ心を留るの徳を以て世の人の手本ホも爲るべしとの例を示し又左ホ記す鼠の話ハ其事柄を以て人間の教と爲すホハ非ざるども臨機應變の例を顕して人ホ示すのたり

鼠ハ玉子を好むものホて折々鳥屋を荒らすことヤウ鳥屋の玉子紛失するこトヤウも鼠の形を察するホ玉子を持つ

べき手もヤウを或ハ又こまを口ホ咥へんとするも叶ふべきホヤウなるをバ其紛失を鼠の所作と思ふ者ホくしてこを爲鼠ハ盗賊の悪名を遁るるホとも其實ハ玉子を盗取るホ相違なし［ちんふきやと］いふ處ホ一人の百姓ヤウ度々鼠ホ玉子を取らるしホ由を或日其所作を見んとて静ホ鳥屋の片方ホ隠れ待居たるしホ間もなく數疋の鼠出で来る其内の一疋玉子の側ホ横倒れ体を屈て腹の処ホ玉子を入れ自分の尾を口ホ咥へて駛と抱込みし処を外の鼠二三疋ホて彼玉子抱さる鼠の首筋を咥へて鳥屋より引出せしを見たり

㊐ 難船したる水夫の事

濱芹ハ海邊ニ生ずる草なれども潮水の及ぶ処ニハ出来ざるものなり或人唯此一事を心得居て危き場合ニ身を助けたることあり

頃ハ千八百二十一年十一月佛蘭西の船一艘びいちへゞて吹ふ夷ニて大風の為ニ難船して乗組の人ハ盡く海ニ溺れ其内唯四人傍の小さき岩ニ泳上りたれども折しも夜ハ真の暗ニて方角も分らず且此岩ハ其郷の岩の欠て海ニ落さるものと見へ水の面ニ出ることも少ニあれバ四人の者ハ大ニ恐れ今ニも大浪ニ巻込まれんと生たる心地ハせざりしが一人の水夫其岩ニ生たる草を見るバ濱芹なり此草ハ潮を被らざる濱地ニ生立者なりとの事を心得居たるニ由て悦で其次第を外の三人へ告げ一同安堵の思を為して艱苦を恐び待居たるに翌朝ニ至るバ果して陸地近くして助を得たりといふ

㊑ 畫工の召使其主人を助る事

「ぜいむすとるふる」ハ英吉利ニ名高き畫工なり「ろんとぷふ」といふ大なる寺の圓天井の壁ニ繪を画くに高き處へ足場を架て日々筆を揮ひしが或日自ら其繪を眺め色々ニ工夫を運らして覺へず知らずして少しづゝ後の方ニ寄

又今一歩ふて足場の端より落んとする危き場合を傍ふ居たる召使の者飛掛て止る暇もなく持合せし繪の具の皿を壁の繪ふ投付けたるバ「とるふるハ大ふ怒を遽て繪の方へ進寄りこハ何事ぞ不届者と家来の罪を責んとし其挙動の次第を聞て更ふ又驚き禮いふふも尚ほりをとて深く其機轉を感ずたりといふ抑この時の有様を考ふるふ「とるふ」ゞ片足を外して下ふ落んとする機ふ當てやを危しふど〳〵色を挑けらるをバ却て足の踏留を失ひ數丈の下の敷石ふ身を碎くこと疑もなきをバ此時ふ差挑て其命を救ふの術ハ當人へ事の次第を知らしめぞ覺へぞ知らぬ自分ふ足場の内の方へ返らしむるの所作を施をふ在るのゆ故ふ主人の千辛萬苦したる繪を妄ふ汚せしも其時の良策なり瞬く隙ふ此利害を決断して其事を行ひ其機を失ざるハ膽力の慥なるものといふべし臨機應變の妙なるものといふべし

⑧十三歳の子供佛蘭西人を捕ふる事

千八百十一年の十月英佛合戰の時佛蘭西の巡邏の船「のふをおんべるらんど」の海岸ふて「かるろんと」いへる英吉利の小船を乗取り其衆組の者をバ生捕ふして佛蘭西船ふ移し老人一人と十三歳の子供一人とを本の船ふ残し置き新ふ

佛蘭西の水夫六人を乗込ませて本國の港ゟ此船を乗廻さ
きべしと命じたり分捕の船ゟハ乗組八人ゟて佛蘭西船ゟ
別もし後ゟるもとゟふ河口ゟて大風ゟ逢ひしゟバ六人の
佛蘭西人ハ固より英吉利の老人も此邊の海の模様を知ら
ず折しも夜ハ真の暗ゟて船中ゟ油の貯も尽き磁石を見て
方角を定ることも叶ずして船中の人ハ力を落しせん方もゟ
くして唯風ゟ吹もて漂ひしゟ彼の子供ハ嘗て此邊を西三
度航海して海岸の模様島山の形ゟども心得さるゟ由り嶋
の峰火を見てゟるもの河口ゟる浅知り乃ち自ゟ舵を取
てまるゟもつわふぷと叫ふ更ゟ乗込ゟて英吉利の軍艦ゟ
近付き大音ゟて佛蘭西人を生捕ゟと呼ぶ聲ゟ應じて軍
艦より兵士来り彼六人の佛蘭西人を捕へてゟ船ハ再ひ英
吉利人の手ゟ返もゟ

第八章謙退をる事

何人ゟても自分を譽ゟ自分の事を大造ゟ云ひ自負高慢を
るゟハ必ず世の人ゟ笑もゟ故ゟ人たるもの
ハ自ゟ低き者と思ひ其言語容貌までも謙るやうゟ心掛
くべし假令ひ他人ゟ譽らゟとも我身ゟ於てハ謙退の趣
意を忘るべゟゟ謙退ハ身の徳の飾とするべく又謙退ゟ
由て事を行へバ徳義ゟも進むべし知何ゟる美徳を備ゟる

とも自負高慢の氣色を見せときハ却て人の侮を受くべし
まして況や内ハ智德の實ふくして外ハ自負の虚を飾る者
をや唯是人の笑種のみ斯る虚飾を好む輩ハ忽ち人ハ其実
を見きりまして真實ハ無智無德と思ひ侮りも更ハ甚
しき輕蔑を被るべし

人々皆我存寄を重んして他人の説を輕んぜるの癖あきハ
ひとをこまを慎まざるべかゝ我より考ふまバらて他人
の説も不都合かるべけをども其本人ハ於てハ其説を是と
思ふべく或ハ又我是とまる説も他人の目ハハ非と見るこ
ともあるべし我身一人と思ふ勿を誥を我身も世界中數千
百萬人の内の一人のを我身自かゝ我存寄を是とまるの理
ハかゝバ他人も亦自かゝ其存寄を是とまるの理ハかゝん故ハ
人ゝる者の常ハ心掛べき一大事ハ我存寄も或ハ非るかゝ
しと自かゝ顧て事を行ふことあり

ⓘ 假着したる烏の事　寓言

身の程を知らざる烏ハかゝて自かゝ思ふハ我身の孔雀ハ及
むざるハ唯衣裳あき故なり美しき衣裳だハハかゝバ孔雀の
仲間ハ入るも更ハ差支の筋ハかゝるまゝと十分ハ高慢の心
を抱き乃ち孔雀の羽根を集て身を飾り假着の裝既ハ成就
して朋輩の烏へ別を告げ今日より我身ハ最早烏ハハ

とて孔雀の仲間ゝ這入たりさまゝ内ゝ實ゝき者ハ外ゝ虚を飾るべくゝゞ假著の衣裳美ゝうと雖ども元身の賤しき鳥ゝゝゝゝバ外見を作る容体も何ゝ不都合ゝて其偽忽ち露見ゝ及び孔雀等ハ大ゝ怒て彼羽根を尽く剥取り本の黒き鳥と為して追放しけゝバ曲者も今ハせん方なく其朋輩ゝ帰らんとゝゝゝども面目ゝく彼方此方ゝて痛く耻辱を蒙り遂ゝ身を容くゝ處を失ひしと云ふ

(ろ)「ゝさゝくふうとん」の事

古くゝ學者大先生とて世ゝ敬ゝ尊まくゝ人ハ多くハ九人くゝもよく禮義を知ゝ却て人ゝ謙るものなくゝ英吉利の理學者「ゝさゝくふうとん」などハ所謂大先生なる者ゝしてゝゝゝふべき人物ゝくゝ兼て又謙退辞讓の君子とゝゝゝ幼年の時學問所ゝて様々の細工物を作て見る人こゝを驚くゝざゝ者なり「ふうとん」ハ常ゝ鋸斧金槌等色々の道具を所持してゝゝを用ることゝ甚ざ巧ゝくゝ其家の近処ゝ麥の粉磨る風車ゝくゝ事ゝバ「ふうとん」ハ毎日こゝを見物して其仕様をよく詮索し其動く機をもよく呑込て家ゝ帰くゝ兼て所持の細工道具ゝて風車の雛形を作て其形くゝゝゝゝも真物の通ゝて最上の手際くゝ此雛形成就して後或ハこゝを屋根の上ゝ置き風を受て車を廻くし或ハ又鼠を用て車を廻く

もこゝを工夫せり其工夫の次第ハ車の輪の内を箱の如く
ふして上の方ゝ麥米おゝど置き鼠を此箱の内ゝ入れハ鼠ハ
其麥を喰ん〻として上ゝ昇るゝ從ひ其重さゝ由て輪を廻
ん〻を趣向せり
又或時友達より古き箱を貰ひこゝを以て水時計を作れり
其仕掛ハ水を滴らして時を計る趣向せり箱の上の方ゝ置
時計の地版の如きものを附けこゝ時の數を記し木の切
ゝて時の針を作を水の滴るゝ由てこの針を廻ん〻ゆうゝ
為せり此時計を自分の部屋ゝ置き毎朝怠らずして水を入
きよく時を誤ることゝなく家内の者も「ふうとん」の時計を見

て時を知るゝどの手際ゝ
此時計のこゝろゝず四方の壁ゝ鳥獸人船又ハ筆術の圖おゝど
を記し皆木炭を以て綿密ゝ画けり
追々年長るゝ及び大學校ゝ入て學問を勉め空氣水沙時見
月星の事ゝ就き知ることゝ
日獨り庭ゝ出て腰掛居たり一処へ遇林檎の木より實の落
るを見て独り自かゝ不審を起し此林檎の實の落るハ何故
なる哉實の内ゝ落る力を備ふる哉或ハ地球ゝ力ありて此
林檎を地球の方へ引付る哉と頻ゝ思案を運らして遂ゝ大
ゝ發明せり其説ゝ云く林檎を地面の方へ引くものハ地球

のカなり此引カハ天地の間ニ定またる法則ニて萬の物を
して空中ニ飛去らしむることなく地球の面ニ止らしむる
所以のものなるべし物ニ大々の量目ありて引力の所作なり
故ニ或ハこれを重力とも名くと又云く天地の間の物ハ互
ニ相引くの力ありて其力の強きと弱きとハ物の形の大ニ
るとニなると其隔の遠きと近きとニ從て割合ありて故ニ月
の体ハ大なるとも地球ニ較べバ小なる也地球の引力ニ
引かれて遊星の体ハ月より大ニなるとも日輪の引力ニ引かる
又此等の天体日月星辰各其居処を定めて運轉を為し互ニ相
近くことなく互ニ相遠ざかることなくも引力の然らしむる

所なりと實ニ古来未曾有の大發明今日ニ至るまでも心付
る人ハ「ふうとん」の名を尊ばざる者なし又日輪の耀く光の
線ハ色々やうニ見えども其實ハ七の色の集まりたるもの
なりとの事も「ふうとん」の發明なり此外いまだ世ニ知られざ
る物事を發明して人の耳目を驚かせしこと甚だ多し
「ふうとん」ハ性質温和ニして短氣なるも其心平ニして朝暮
變ることなし嘗て一疋の小犬を飼ひ「だいやもんど」と名を付
けて大ニ寵愛せり或日「ふうとん」急ニ用事ありて部屋の
内へ書物を取散らせしまゝ外ニ出歸て見れバ留主中ニ
彼の「だいやもんど」主人の机の上ニ飛上て蝋燭立を倒し其

書物を残らず焼尽して多年辛苦の績も一時に灰煙となり
たるを「ふうとん」は怒る氣色かく此犬を撃ち殺して云
く嗚呼だいやもん汝は不調法したるとも其不調法たる訳
を知らざるかと○「ふうとん」は博く物を知り多く事を學
びたる人物なれども其學才に誇らず常に人に謙遜して深切
を尽し假令ひ賤しき身分の者にもこれを粗末に取扱ふ
ことなし固より其時代に於て天下の人物「ふうとん」の右に
出る者なしと雖ども其病で死せんとする時の言葉に云く
後生畏るべし余が今日まで學得し事を後の世の人の學進
むべき知見に較べるに固より見るに足らざるなり學を
好て食を忘るるとは「ふうとん」なるの事なり一室に籠りて
深く物事を考ふるとは食事の支度出来るとも膳に就
き或は三時も食事に後ること久しくして千七百二十
七年病に由て死せり年八十五歳なり

第九章　禮儀の事

人々の心同じかるざるべからず我思ふまゝのことを包出して他人
へ告げ少しも遠慮をすることなくば忽ち喧嘩爭論に及ぶべ
きは疑もなきを故に人に交るには自から顧て我心を取押
へ斯の如くせば他人の氣に逆ふことなるべしとよく前後
を考て失禮の擧動を為さべし

世間の附合ふに於て人々の言語舉動ふ自らゝ定まりたる式ハ
ありて互ふ禮を重んじ深切を尽さざる如くせざるべからず譬
へバ手紙を人へ遣さるゝ先方の人ハ全く他人ふてもこと也
ふ對して自分の姓名を記さふハ君の賤しき家来たる某と
書くを定式とも又先方の人をさきて敬ふ心ありしと臣ども
懇意の人ゆゑバこゝふ名宛をもゝ貴き君と記さるゝ人
ゝ也 以上日本の手紙ゝ様の字を用ゐるが如し 右の如く唯表向ふ人を崇て身
を謙るハ不正直ふ似たりとも粗暴の氣色を隠さんとする
ふハ是非とも斯くせざる所ゝらぶて若しさもハゝきして手
紙の表ふ粗暴の有様を丸出ふ記すことハゝバ先方の人ハ

必ず快く思はざるべし
男女會話の時ハ互ふ禮を盡して粗言を用ひず男子椅子を
取て婦人ふ進め然る後ふ自分ゝ椅子ふ就くを禮とす婦人を重
んずるハ弱を助ざ坐定るゝハ互ふ相待て人より先ふ言を
發せざるを禮とす或ハ斯る儀式を好まざる者多しと雖
ども之れを欠くゝハ必ず無禮ふ陥るゆゑふ常ふ此禮
を勉めざるべからず右の如く禮儀を勉るハ或ハ面倒ふも
ハるべきもとも僅計の身の我慢を抑るのみふて他人を怒
らしめざる所得るハ亦善からずや禮の本ハ仁ゝあり人を愛
するの仁ハ其人ふ對して禮を盡さゞる可けんや無益

の言語容貌を以て其人を怒らしむ可きんや

居ハ氣を移すとハ古今の金言思ざる可らず我身の觸る所のものハ從て我氣分も變るものなり喧嘩口論物騒がしき中ハ居るとハ我氣分も自ずから騒がしく荒しくなるものなり禮儀正しく言語柔らかなる中ハ居るとハ我氣分も自ずから和らぎて禮儀正しくなるものなり禮儀正しき仲間ハ附合をれば自ずから我身の粗暴を制ずべき力を得て次第よこしまハ慣れ遂ハ其慣ふ所性と為て生るべし禮儀正しき人のやうハなるべし

禮儀の德も他の諸德の如く其不限あるべかるべ禮を尽して分ハ過ぎ諂ひ諛るハ至る者ハ其見苦しきこと禮を知らずして粗暴なる者ハ異ならず故ハ過るも諛るハ至らず及ざるも粗暴ハ至らず其中道を得て男子の風を失ざるものを真の禮儀とハ稱するなり

いべるーやの百姓の事

人の位貴しと雖ども賤しき人の禮儀ハ感ずるものなり人の位賤しと雖ども禮儀を盡せバ譽を得べし抑人の重んぜる所のものハ禮儀の贈物ハも勿論ふも又其儀式ハも勿論ふも唯其禮儀の生ずる情合と禮儀を尽す仕方のやさしき所を悦ぶなり故ハ王公貴人大造なる物を人ハ與へて却て人

心の歸服を得ざることゝなり然るに見るかげもなく貧賤しき者の禮儀を盡して些細の物を贈らざるも其舉動のやさしきに由りて大に譽を得ることゝなり譬へば英吉利の君第一世ちやるすは人に物を與へて惜むことなくして魚ども禮儀の法を知らざりしゆゑ人を悅しむること能はざりしといふ

往古べるーやの國にて或る百姓其國王にたきせるきせの通行せらるゝを見て何ら物を進ぜたく思へども身に外なざるまゝに傍の小川を走て両手に水を掬ひこれを飲ませ給へとて國王に獻ずれば王も此奇なる贈物を見て可笑

ハ思ひたれども其志を感じて厚く禮を述べられたりさきに此百姓の容貌こそ穢き下民なれども其心の美なるハ君子の人といふべし

(ろ)英吉利の人ちやうるすんに行きし事

今より百年以前までハ英吉利の人も旅行せること今日の如く多からざりしが他國にても英人といへば氣を付てこれを見しものなり頃ハ千七百年代の末或る英人伊太里に旅行して同國の都府ちやうるすんに着し処々見物の折柄兵隊の通行に逢ひ立留てこれを眺居たりしに兵隊の内に若き士官一人ありて路の傍に旅人の見物せるを見て身振を作ら

んとせしふや往来の溝へ足を踏外して其機に冠物を落し
たるを群集の見物人ハこれを見て大に笑ひ旅人も定て可
笑く思ひしなるんと或ハ英人の方を見る者もありしが案
に相違し此英人ハ顔色をも變へずして冠物の轉る処へ急
ぎこれを拾取て物静に禮儀を為して彼の若き士官へ渡し
たるを士官ハ其挙動に驚き赤面の体にて受取り走
て本の行列に加りて旅人も其場を過去たり此事に就て
ハ双方の間一言の言葉をも交えずと雖ども心やさしき深
切より生ずる禮儀の挙動なるを誰かこれに感ぜざるも
のあらん彼士官屯所へ帰りて事の次第を隊長へ告げ言葉

を盡して旅人の所作を稱譽しけるを隊長もこれを捨置き
難しとて惣大將に言上したり斯くとも知らぬ英人ハ其夕
刻旅宿へ帰るを陸軍の副將本陣より使者として来て彼
の英人を迎へ饗應せんとて待合居たり英人も望の外の事
に驚き其意に任せ本陣に伴なひて厚き取扱を蒙り此より
英人の評判市中に流布して歴々の家に招待せられ出立の
時ハ方々への添書を貰ひ伊太里の國中を快く旅行したり
と云ふ
抑此英人ハ格別富貴の人にもあらざるに唯一時の愛情深
切の故を以て當時名高き伊太里の國中を旅行し王公大人

富有の身ゐも叶もざる取扱を受けしハ豈とも禮儀の德と云ざる可けんや

㊇第十四世「ろいき」の事

佛蘭西國王第十四世「ろいき」ハ人君として申分ゐき人物ゐハいつゞもども仁心深き故を以て其挙動自ら眞の禮儀ゐ適ふこと多し或日別殿ゐて家来の面々を召し酒宴を設け様々の物語し給ふ祈列坐の大臣「ろるまぐふく」の君用事ありて酒宴の席を立ちけをバ其跡ゐて一坐の人へ仰せらるけるハ唯今朕ゞ話せし物語ハ面白からぞして何ども退屈せしふらんとの上意ゐ一同言葉を揃へ君の命の知く最初の御話口をハ些相違いたりと言上しけをバ王の云くさもいつゝん此物語の始末ハ今坐を立ちし「ろるまぐふく」ゞ父の身分ゐ差合いつることゐを心付ぞして不圖話抜けしふをどもよく前後を考ふをバ一時の物語を以て天晴國家の用を爲をべき人物ゐ心を傷ましめんよりも寧其物語を消さんものをと思ひ態と面白からぬやうゐ話したるゐと

右ハ唯當坐の興ゐ國王のいををしことゐをども其事柄の始末を尋をバ決して滑稽ゐ非いつゞを真ゐ禮儀の趣意ゐ適ふものといふ可し

「ろれき」王ハ自らゝ私ホ人を愚弄せしことなく又此事ホ付て
ハ王家の親族へも固く戒めて云く我等の身分を以て分
別もなく妄ホ人を罵て人を嘲けることなゝバ其物事ホ害
を為ることゝ雷電の如く又毒矢の如くなるべしと○親王の
奥方ホ兼て惡む所の人ゝ弐日奥方ハ此人の次の間ホ居
るを知らずして頻ホ談を斯くも惡き男ハ見しことなしホ
どゝて次の間までも聲の聞るやどホゆゝけをバ國王此様
を見て聲を怒らし自ホかゞたてゝ云く朕ハ此男を國中第
一流の人物と思ふあり此人ハ智勇兼備の良臣ホて國家の
干城ともいふべき者なるを妄ホ誹謗をるハ汝の罪許をべ
らず速ホ當人へ面會して粗忽の罪を詫をべしと

第十章飲食を程能をる事

人ハ老若の差別なく身体を健ホし力を強くせんが為ホハ
相應ホ食物を喰をざるべからず食物の量ハ人々同じゝら
ず身体の強壮なると虚弱なるとホ従て銘々ホ足をる所の
分量ゆゝ若し此分量を過て多く喰ふときハ必ず害なきこ
と能たず又魚類肉類其外念入たる料理をゆゝ過分ホ喰
ふべゝらず平生斯る美味を喰て其分量ホ過るときハ必ず
病を引起し遂ホハ生涯の病身ホ陥ることゝゆゝ
足をるゝ多く喰ふ者を大食の人と名け旨き料理を好む

者を美食の人と名く何人かても大食を貪り美食か耽て自
ら用心もること能をざる者いまだ正しき人ハこれを見
て賤しまざるを得ず食物ハ固より人か快きものかをハ程
能くこれを喰ひ悦でこれを味ふハ當然の事かをども唯食
物の事かのみ心を用て朝夕其料理か心配し食物を以て人
間第一の樂とをるハ人たる者か不似合かる擧動といふべ
し世の中か賤しむべき惡事多しと雖ども食を貪る程賤し
きものハいまだ其目途とをる所如何かも卑陋かして絶て
風韻の趣いまだざをバこをふ耽る者ハ必ず人の輕蔑を受け
ざるを得ず

大食美食ハ惡事たをども尚こをより甚だしきものハ酒
を飲む事即ち是なり何をの時代かや世の人酒を造ること
を發明して葡萄酒「ぶらんぢ」「うおーき」「ぢん」以上三種焼酒の類なり
る酒等の種類いと多くこをを用をバ身体か害を為をこと
固より云ふを俟たず假令ひ程能く飲むも多少の害かきこ
と能ずず都て酒の中かハいまだこれをるこをろを精を含めり此
酒の精ハ人を酩酊せしめ人の精心を乱だり一時其人をし
て癲狂の如くふらしむる毒藥なり世の人々酒か酔て惡事
を為す者少からず酔の甚だしきハ人か癖付け人を殺を
か至ることいまだ或ハ假令ひ僅だりをの酒を用ひても其言

語應對ハ常と違ひ馬鹿らしくありて醉醒の後ニ至て後
悔するものあり故ニ少年の者ハ慎んで酒を飲むべかゝむ
一杯ハ二杯の手引とあり二杯三杯遂ニハ惡しき慣とあり
て自かゝ禁ぜべうゝざるニ至るべゝ酒を飲て飽くことを
知らざる者を酒風漢又ハ大馬鹿者と名く斯る馬鹿者ハ酩
酊の時假令ひ大惡無道の擧動を為さゞるも其氣分の慥ニ
らざるハ疑もなゝまで何程働かんとするも其働下戸の慥な
るニ若ざるバ世間の人も斯る不慥なる酒客を頼ニして事
を任せんと思ふ者なし故ニ酒を飲むが為ニ人ニ見放されて
職業を失ひ既ニ貧乏ふる其上ニ酒を買ふが為ニ錢を費
し其貧乏ニ又貧乏を重ね一家内の者ハ憐むべき有様ニ陥
まて誰一人として其主人を親これを敬ふ者もなく家内
の難渋ハ云ふまでもなく遂ニハ貧と病とニて當人の壽命
をも短くするニ至るべきなり

ⓘ二疋の蜜蜂の事　寓言

弥生の朝麗らゝふして桃ハくもふに李ハ白く園ニ植たる
草花も今を盛ニ咲栄ふちゝニ疋の蜜蜂ハ蜜を求て飛
来て花より花ニ移ふ美味を嘗め其たのしみ斜ならざ
しゞ其一疋ハ知恵ありて飲食を程能するを知て花の蜜を
嘗る間ニハ又其臘即ち蜜臘を取て股ニ附け巣を作る覺悟を

為せるハ一疋の方ハ絶て心を用ひず唯一時の慾ハ引うさ
まて飽くまで蜜を嘗るのみあり
やがて桃の木の邊ハ至り其枝ハ廣ロの「びん」の拭ひたるハ
まて其中を見まバ澤山ハ蜜の貯ひ（此「びん」ハ蜜蜂を捕ふ為ハ設けし者あらん）
一疋の蜂ハ兼て大食のことあまバ僥倖ありとて去まを嘗
んとし彼の朋輩の心付をも聞入まず真倒ハありて「びん」の
中ハ這入り前後も顧みずして獨り食を貪ぼり一個ハ用心
ハ用心を加へ試ハ一口ハ嘗たまども災難の程も圖らまず
とて直ハ其処を去り又最前の花の間を徘徊し食を求めて
真ハ其味を嘗め日もまや西ハ傾うんとまバ彼の「びん」の
側ハ来りて其朋を呼び共ハ家ハ歸るべしと云へど答ふる
聲もふくび「びん」の中ハて八終日身体をも動うさずして貯の
蜜を飽くまで嘗め腹ハ充滿して最早一口も咽ハ通らず去
迚亦其處を去ることも能ハず其足も弱ぼり其羽根も動ろ
ず惣身の氣力衰へて進むも退くも自由あらず苦しき色を
發して云く樂ハ身ハ快しと虽どもこまハ恥るときハ必ず
身の滅亡を致すものありといひ終て命を落したり

（ろ）「ろいをころあろ」の事

「ろいをころあろ」ハ「へねしや」國の貴族あり其時代世間の風
俗宜しかりを交る所の友達も皆不行状ハまバ「ころあろ」も

此悪き友に打交ぜ飲食に耽りて養生を知らぎ始終腹痛熱病痛風などの病に羅り一日として快しと云ふ日ハふりぎしが年四十歳の時に至り或る醫師に異見せらぎ始て發心して行狀を改め僅に一年を過ぎぎして稽き持病も全快し又昔のころふろに毎日の食物ハ十二「おんぎ」ハ目方の名ハ及ふ当る を限り飲物ハ薄き葡萄酒十四「おんぎ」を限る一日の食物十二「おんぎ」とハいちり少きやうにぎどもころふろ」ハ出ぎに由て稀ふる長壽を得たり年七十歳の時高き處より落て片腕と片足とふ怪我せしことありて大抵この年齢ふて斯る大怪我を為せバ療治ハむづかしきものふて或ハ一命も危かるべき筈ふふ「おろふろ」に於てハ然らぎど兼て身体に申分なりざるバ此度の怪我も直に平愈して旧の如くあり八十三歳の時に山に登り馬に乘り或ハ戯作の書ふど後著述して樂とせり氣力の盛ふること推して知るべし其容貌いつも悦ぶしくして死るとふ迄すでも子供等と遊戯を苟ふも心配の氣色ふし九十八歳の時病に羅て何の苦痛もふく往生せしと云ふ

ⓗ「おやくしむきん」の事

「おやくしむきん」ハ英吉利の「ぽふるとすとん」と云ふ所ふある造船場の職人ふり兼て大酒を好む男ふぎバ其家の貧乏

ふるも天然の報自分ハ勿論妻子まで粗服粗食ゐもひろつ
ゝぞ其住居ハ蘆陶しき裏店ゐひろて世帯の道具とてもひ
るゝゐし或る夜おやく」ハ酒飲朋輩と共ゐ市中をぶらく歩
行して不圖人の家ゐ這入をしらバ遇然此家ゐ禁酒社中の
寄合ひろ其席ゐ容貌温和ゐして如何ゐも重々しく見る人
物一人坐を正しくして専ら大酒の害を述酒を飲まざる人
の仕合ある有様を説き居たるバ「おやく」も酔中とハ雖ども
此口上を聞き此様子を見て大ゐ心を感ず口上の終るを待
て其社中ゐ乞ひ已ゞ姓名を記して禁酒の仲間ゐ加はる
たり

「おやく」の酒を禁ぜし後朋輩の者ハ頻をゐこれを嘲り笑へ
ども元来正直ある男ゐもバ一度約束せしこと反違へぞ酒
店ゐ方へハ足をも向けず毎日稼て得る所の銭ハ家の世帯
ゐ用ひ妻子も今ハ十分ゐ食物を得て暑さ寒さの心配もゐ
く家の道具も次第ゐ増し子供ハ學問所ゐ入りて文字を習
ふやゐ至るゝ次第ゐ稼ぐゐ従ひ少しづゝ有餘の金も出
来たるバこゝを始末して彼の「ぜいういんぐぐんく」とて小
金を預る両替屋へ預け病氣の時の手當とゐし且又追々年
の積るゐ従ひ働くことも叶ざゐ至らバ此金を以て老
の身を養ちんとて生涯の覺悟を為せり

舊き酒飲の朋輩ハ「おやく」が身持の改まりたるを見てこれを
ふ感心を発き笑ふ却てこれを笑ひ様々ふ非難をるこ
を可笑けを我身ふハ襤褸を纏ひふがら他人の美服を得べ
き身持をる笑ひ我口ふハ冷き芋を喰ひあがら他人の美
食を得べき身持をるを笑ふハ不都合あらずや或日「おやく」
其朋輩の詈るを挫き大勝利を得たることあり朋輩の若者
途中ふて「おやく」ふ行逢ひ「おやく」汝ハ酒を止めたるとも心
よくハあるまじ憐むべき奴哉汝が顔ハ追々黄色ふあるし
ぎとゝひろをバ「おやく」ハ其時丁度両替屋へ金を預け行
く道ふて袂より黄金十枚計出してこれを見せ汝等が云へ

る如く我袂ゆでも追々黄色ふあらかゝをしぞと云ふ流
石の朋輩も大ふ赤面しゝとよりゝ後ハ絶て「おやく」を嘲る
者ふうゝしと云ふ

⑫美味ハ粗食ふ在りと云ふ事

奢ハ元口と腹との欲ふ然るふ奢ふ長をる者ハ却て此欲
ふ逢こと能ず其故ハ已ゞ口腹既ゝ美味ふ慣て彼の粗食
をもて達者ふる人の口を悦でしむる真の味を知らざるバ
あり往古べるーやの君「ゆるたきせるきを」敗軍のとき兵糧
もつきて辛ふとて干たる無花菓の實と大麥の「ぴん」を
得て古喰ひ覺えず聲を發して云く世の中ふ斯る美味

ゆるふ朕ハ今日ハ至るまで其味を知らざりしありと

第十一章養生の事

身体の健ふるとハ其諸道具申分ふく各定りたる働を為さを云ふ譬バ腸胃ふハ自然の力を備へて食物を消化し心の臓と脉の管ふハ申分ふくして血の運行をよくし肺の臓ふハ痲ふくして血の中ふ空氣を通ト脳ハ知識の役を勤め皮膚ハ身体の中の穢物を蒸發る等是ありふ也健ふる有様と以ふ右等の箇条ふ一として申分ふるもバ身体ハ常ふ快くして何の苦痛もふく人並の仕事を為さふ差支ふし即ち是も人間第一の幸福ありて若し然らざる者ハこれを不幸の人と以ふ人若し心を用て自分ふ其身体の諸道具を守るときハ天の恵ふ由て謂ふく要を生ずるふとふく其身を安全ふを得べし唯自分ふ不養生を為して自分ふ災を招く者ハこれを如何ともせべ分ふざるあり譬へバ過分ふ物を喰ひ或ハ身体の為ふ宜しからざる食物を用るもハ心ふ腸胃の害を為ス亀し過分ふ精心を用ひ心配をすること多けれバ必ず脳を害し心の臓を殤ふべし身体の暖まりたるもハ俄ふ寒き風ふ當るバ忽ち皮膚の氣孔皮膚ふハ目ふ見へざるふさき穴りことを氣孔と以ふを塞で蒸發を止む故し右の如汗ふても氣孔より出るふく人の用心宜しからざる欠或ハ不意の怪我ふ由て身体の

諸道具を殤ひ其働を誤ることゆゑに病と名く重き病に罹てハ死をる者少かゝらぬ故に人の身を達者に保たんとをるハ定まれる法則に従ざる可からぬこれを養生の法といふ天より授かりたる身の力を保ち身の養生を為さんが為に其道を學び其事を行ふハ人たる者に大切なる職分なり

先祖の病を子孫へ遺し傳ふることゆゑを遺傳病と名く或ハ一人の病毒を大勢の人へ傳へ及ぼすことゆゑを傳染病と名く傳染病ハ空氣即ち風に由て其病毒を弘ることゆゑ又ハ其病人に觸れて毒をうつすことゆゑ故に此遺傳病傳染病に罹る者ハ病を起したる本人ハ勿論其病の本を尋ぬるに必ずこゝを造りたる罪人なれど得て即ち遺傳病ハ人の父母たる者欲若くハ其先祖の不心得ゆゑ此病毒を釀し子孫に傳へしものなれバ其罪ハ先人に在るなり傳染病ハ濕氣深き土地欲又ハ大都會の内の隘く穢き町に居り衣食住に不自由して悪き物を喰ひ家を汚し身穢せし者より其源由を發したるものなり

右の次第を以て考ふるに人たる者ハ其當人の為ばかりを勿論亦同類の人の為を思ふても身の養生を為さゞるべからず即ち是も人間の勤なり

生を付き達者ある人の身体を申分なく保たんとするハ左の箇条を守らざるべからず○住居の土地ハ高くして燥きたる處を撰むざるべからず○家ハ清浄ゝして昼夜とも空氣の通をよくせざる可からず○度々惣身を洗ざる可からず○毎日の食物ハ水物の外ゝ二十四「おんす」「日本の八」及だうてゝ当る　より少ゝかるべからず此二十四「おんす」の内少ゝくも三四「おんす」ハ魚類肉類を交へざるべからず○食物ハいつも同ど品のみを用ゆべからず去迚亦一度の食事ゝゝより多くの品を取揃へて喰ふべからず○焼酎ゝゝハ醸したる酒の類を過分ゝ飲むべからず○毎日一時欠今少し

家の外ゝ出でゝ空氣ゝ吸ざる可らず身と心との働を進る為ゝ毎日の仕事ゝゝる可らず仕事をる間ハ一日ゝハ時乃至十時ゝるべし毎日斯く働きし其余の時ハ面白く心を樂むべし○濕きたる衣服ハ片時も身ゝ着く可らず寒き隙間風の吹通を家の内ゝハ片時も止る可らず○一昼一夜二十四時の内ゝ六時乃至八時の間眠ゝ就く可し時ハ西洋の時ゝて其一時ハ○甚だしく心配せざるやう心を用ゆ日本の半時ゝるべし不幸の事ゝ遭ふも氣ゝを張てこきゝ堪ゆべし○世の人々皆よく此規則を守らゝば世界中ゝ殆んど病の種を盡して人間の幸福ハ今日をもて思議をべからざる不ど

増し進むべし

㋑ 濕氣深き住居の事

英吉利ハ養生の法をよく心得たる一人の婦人ありて或日見舞として其妹の家ハ至てしハ此妹も兼て心意ハいしろぶぬ婦人あるとも些物事の道理ハ暗くして養生の道を知らず其住居の家ハ沼の側ハかりて濕気甚だしく霖雨ハどの時ハ臺所の牀ハ水の支るハどの有様あり姉ハ久々ハて妹ハ逢ひ家内の機嫌如何やと尋ねけるバ妹の云く我家ハ近来とりく病人多く此地へ轉宅せし以来藥の絶間ハし良人ハ痛風ハて手足も叶ハず終風邪ハ犯さるる子供等ハ毎冬咳嗽ハ苦しむのみ去年の十月ハ姉上の知るる通り家内殘らず熱病ハ罹りて男の兒両人を召使一人を失ひたり如何ハもバとて斯くも不仕合の打續く屋きや合点も行かぬことなりと云ふ姉ハ眉を顰めこハ其許ハ仕合ひしきハ用心の宜しかるべきあり家内の病氣ハ穢き沼ハ近く住居をるより起りしことなるバ此土地ハ住ふ其間ハ決して病の絶ることなるべしと云ふ妹ハ合点ハ居るを若しも姉上の云ひ給ふ如くならバ明日ハも家を移るハ最易きことなれども禍の神ハ祭り行く處ハ付纏んと假令ひ或ハこを振り棄るも更ハ又ハしき災難ハ逢ふ

も計り難しといひけるバ姉ハ又も言葉を盡して云く決して疑ひるべからざる固より人たる者ハ何題ふて如何なる災難ふ逢ふも計り難しと雖ども眼前ふ災難の来るべき恐ひるるにハこれ避けざる可らず即ち是れ人の職分あり此職分を盡して避くべき禍を避くるとなハ必ずしも再び禍を蒙るべきふひらず天ハ世界萬物を支配する為の法を設け人の養生ふも天然の法ひり今其許ゆゑふ住居するハ天より定めたる法を破る罪あるバ一家内の病ハ即ち其罪の報ありと彼是理解して妹も遂ふ其言ふ從ひ速ふ轉宅したりけるバ其後良人の痛風も全快し數年の久しきふ至るまで一家内ふ病氣の沙汰ふてもなし

ろ　胃の病を療治したる事

胃の病を療治するハ英吉利の或湯治場ふ飲食不消化ふる胃の病を療治すると評判高き醫師ひりさるども此医師ハよき藥を用て珍らしき療治をするふ非ず病人ともバ飲食を扣へ家の外ふ出で少しづゝ身体の運動を為さしむるのを或時肥滿したる中年の男この醫師の許ふ来りて身体の苦痛を訴へ療治をこひけるハ醫師ハ其容体を見て忽ち悟り此病人ハ珍らしからぬ例の金穴ふて平生家を出るバ馬車ふ乗り絶て身を動かすことふく勝手次弟ふ飲を食ひし奢侈ふ増長せ

し者ありと獨り心に點頭きて病人に向ひ共に馬車に乘て野邊に出浮てハ如何やといふに病人も同意しけるバ車の用意してこれを載せ醫師自らゝ手綱を執て市中を離れ凡そ五里ばかりの處に至り誤まて鞭を落しけるバ車を留て病人へ彼の鞭を拾ひ呉るよとの頼に病人ハ何心なく車より下りて鞭を拾ひ取らんとする其間に醫師ハ馬の頭を立直して後の方へ駈出し突ひ放ち病人を振返り見て徒歩にて獨り歸を給へ昼の食事ハ旨かるべしと云ひつゝ馬を馳せて我家へ立歸へるなり此日より病人ハ次第に全快の方に赴きしとぞ

又英吉利の都「ろんどん」に名高き醫師ありて些風違ひの人物にて世の人と異なる奇人と称せり或日食傷したる病人との醫師の家に至りて療治を乞ひしに医師ハ其脉をも察ぜず何事をも差圖せずして病氣とかゝハ毎日六文ずつを儲ける仕事にして六文ずつの物を飲ませ食ひせらるべしといへる此口上ハ奇なるに似たれども実に養生の極意にて人の守るべき教なり

㊁ 若き男風を引きし事

若き男始て商賣に取掛り或夜芝居より歸る途中にて風邪に犯されて其翌日床に臥して僅ばかりの藥にても用ひるハ全

快そくき筈ふろふ商賣の事忙しく一日の暇をも惜みて翌日も店ふ出で其暮方ハ昨日よりも氣ふ悪くなりたるとも兼て血氣烈しき若者ふをバ尚もこをを恐をを又其翌日も店ふ出で其咽喉ハ追々煩衝して痛を覺ゆるとも格別の事とも思ちを其日も暮をて夜ふ入を馬車の屋根ふ乗て悪々ふ行き商用を達せりとをりう病症ハ次第ふ募り聲も嗄をて難渋をれども尚商賣ふ忙しくせし折柄或醫師用事ありて其店ふ至をたまく此男の様子を見てとハ容易ふらぬ容体なりとの儘捨置きふバ一命も危かるべし片時も速く家ふ歸をて療治し給ふべしと云ふ此男も不請ふがら家ふ歸り様々ふ手當せしが最早手後ふて呼吸の管の頭より肺の臓へ通る管までも膿を持ち迚も養生の叶ふべきふあらず二十日をりの内ふ命を落し親類朋友寄集りて歎き悲むと雖ども更ふ其甲斐ふりしと云ふ抑この男ハ性質可愛らしく其行末ハ必ず事を成をべき見込ある人物ふをしが唯養生の法ふ心を用ひざるようして不幸短命の死を致せを恐るべき事ふあらずや

第十二章自ら滿足を知る事

自ら滿足して足をるを知ると云ふ事ふ付正しき滿足と正しからざる滿足と二様の區別ありて人の有様或ハ其身ふ

愉快からざるをいとゝべし譬へバ衣食其外の品物ハ不自由なるハ愉快うゝざることあるときなども人ハ各知恵の働いて身体の働いるものゝ為ばヒゞ知恵と身体とを以て此愉快からざる有様を改めてよゝ方ハ赴くんとするハ毫も妄なる挙動ハいゝを斯る場合ハ至て自ゝ足をるを知るかゝて其不自由ハ安んド何事をも為さゞるハ正しゝらざる満足と云ふべし又或ハ人として眼前災難なせやゝるゝをいとゝべし譬へバ濕氣深き家ハ住居して身体ハ害を受る歟又ハ弊もたる衣服を着て寒き思を為さゞ如しこの場合ハ至て容易く繕ひ得べき衣服をも繕ずして自ゝ足

をゝとなるハ此亦正しゝらざる満足なり開闢の始より世界中の人々其いるゝハ安んドして自ゝこの満足をゝとゝ悪事災難の除くべきを除ゝ堪忍ハ堪忍して日を送ることゝもいゝも今日の日ハ至るまでも此地球ハ蠻野の域かゝるべし

真實の満足とハ人々の才智と其身分とハ相應をゝき有様お安んド我力を盡して如何ともべかゝざる悪事災難をバ甘んドて身ハ引受け常ハ心ハ慊よゝ者を云ふ即ち是を正しき満足なりこの満足ハ人の美徳ハて善人の常ハ心掛る所なりものゝふもバ世の人こゝを以譽めざる者なし

己が力を以て達すべき幸福を得て尚も満足せずして知らざる者のごとく名けて名利を貪る人と云ふ世ふ名利を貪る人のごとく天道の然らしむる所ふて或ハ世の為ふ益を為すことなくして貪ども其當人ふ於てハいつも満足せしことなく真実の幸福を味ふと能はずこれふ一生を與ふるハ其二を欲し功名既ふ高きも更ふ尚高からんを好み死ふ至るまで飽くことを知らざる者あり往古歴山王諸國を征伐してこれふ神領し最早押領すべき國も盡きたりとて涙を無ふして歎息せしといふも足を知らざるの不幸あり位貴しと雖ども家富むと雖ども これを失ふの患ふ為ふ得ざるを

バ心を安んぜざるふ暇なくこれふ引替へ人間衣食住の物を身ふ相應ふ求め自ら満足せる者ハ其心常ふ安くして身の患ふ少くし右の次第を以て考ふるバ容易ふ取除くべき悪事を除ずしてこれふ安んぜるハ満足の易きふ過ぐる者ふて宜しかるべと雖ども其得失を總て論ずるときハ先づ我心の体を定め程よく度ふ從て満足すべきあり

ⓘ黄金の玉子を生む鵞鳥の事　寓言

或人の家ふ毎日黄金の玉子を生む鵞鳥ありて主人ハこの幸福を得て満足すべき筈あるふ却て貪欲の心を増し毎日一づゝ玉子を取らんより彼鵞鳥の腹を割き其無盡藏を開ら

んものをと思ひこまを殺したるが唯一の玉子をも見ぎ大ふ望を失ひ後悔したりとぞ

㋐青雲の大人不幸の事

へりくどんだまハ英吉利王第三世およふトの時代ふ宰相と為りて國の政事を一手ふ握り功名青雲の大人として其威權甚だ盛なるハ國中の人ハとの宰相の力ふ依て幸福を得し者多しと雖ども宰相の身ふ於てハ却て然らぢ十七百九十五年十二月の晦日およんとんくまいるといふ人宰相を訪ひ様々の談話して夜深更ふ及び翌早朝復と其家ふ至り主人の部屋ふ入て見るハ宰相ハ此度喜望峰の地を攻取て英吉利の領分と為し印度の地方を護る事ふ付長々しき書面を讀居たり當日ハ正月元旦のことなるバおんくまいるハ一應の挨拶して新年の祝詞を述べ當年も亦日出度君の幸福を祈ると云ひしふ宰相ハ忽ち言葉も亦く心苦しき様子ふて茲年ハ何卒去年よりも仕合を得たきものなり去年一年の其間ハ一日として愉快き日ふ逢ざりしと云へり右ハ宰相の心中より出し懺悔話なり傍らより觀て其身分を考ふるハ生涯の間思ふ事の成らざるハあく功名青雲の極度ふ達したる者ふ似たれども其當人の身ふ於てハ尚ほの不足なりとぞバ人の妄ふ名利を貪りて飽くこと能知ら

ざる者ハ猶彼黄吉利の宰相「どんだき」の如しとて「ちんく」も
いる常ゐ入よ物語せしとぞ

㊁ 御殿の鼠と田舎の鼠の事

或日御殿住居の鼠其友達ある田舎の鼠を尋ねけるバ田舎
の鼠ハ住居の小屋ゐ有合ふ豚の塩漬ゐ出して色紙取
持ち馳走ハ粗末ゐるも客の扱ハ深切ゐり食事終りて四方
八方の話ゐ面白く一夕を過し其夜ハ客もこの小屋ゐ一宿
して翌朝暇乞して帰るとき主人を誘ふんとし已ゞ住居せ
る御殿の廣大ゐして萬事饒ゐる模様を大造ゐ述立て是非
ともこの度来りて一見せらるゝとの勧ゐ由を田舎の鼠
も其深切ゐ黙止し難くさらバとて二疋の鼠同道して御殿
の方へ赴きゝり道をゝゝ日も暮て御殿ゐ着せしハ既
ゐ初夜の頃ゐりしゝども馳走の残物ハ澤山ゐて牛の乳も
ゐり玉子焼もゐり菓子の種類も一通りゐらぎ「ちい」
製したハ「ぢるめざん」の銘産ゐり二疋の者ハとの馳走を味
ひ極上の「ちやんぢん」酒ゐ鬢ハ浸して酒興いとゞ半ゐ至ら
ぎ忽ち雛狗の吠る紙聞て大ゐ驚き一座の興を失ふて酒の
酔も醒やんとする折しも壁の彼方ゐて又も聞ゆる猫の聲
まハたまらじと二疋の鼠生るる心地ハせざりけり漸くこ
の騒動も治りて先づ安心といふ間もなく勝手の方より下

女下男間毎間毎を掃除して宵の酒宴の跡仕舞壓一片も捨置ろ迄跡ハ空しくありけり田舎鼠ハと叫きつき聲を出さもかろくふ主人ふ向ひ云ひけるハ君ゞ住居の奇麗ふる其馳走の結構ふるも斯く恐ろしき心配ふハ迚も桀ハ堪難し田舎のふ屋の粗食ふて安く月日を送るろ身の生涯の氣樂ふ迄安きかゝ迄して何物をろ美ふりと云ろん苦心ふりて何物をろ饒ふりと云ろん最早御暇賜ろゝ迄早々田舎へ歸ゞしゝ迄

⑫貧院の婦人滿足せる事

或る貧院ふ[でつと]といゝる婦人ふり其身の分ふ安んゞ自ろゝ滿足せろ有様ハ實ふ人の千本ともふろゝきものふり抑この[でつと]の由来を尋ろふいとけふき時より父母ふ離ゝ叔母の家ふ約ふとふり不自由ふく養ふたる者ふり此家ハ以ゝ貧しき暮しふハ以ゝゞも質素儉約を守て一家内奢侈の沙汰を聞ろゞ叔父の性質子供を愛し常ふ其子供等へ勸し様々の談話をバ為さしむゞも他人の身の上の事を噂し他人の家内の事を噂し他人の衣服の事を噂し他人の為ふ仕事の事を噂ふるハ固くこゝ以禁ぜり平生人ふ告て云く他人の噂話ハ子供の心を散々ふ打碎くものふり若しこゝ以禁ぜゞして朝夕人の噂のゝを聞き人

の噂のみを話さるれハつとあくこまゝ慣まして宜しからざる考を為さゝ主るべしと

「そつと」ハ叔父の教育を蒙て既ゝ年齢ゝも及ひ或人の家ゝ嫁したりしゝ不幸ゝして十五年の間ゝ彼の叔父叔母を失ひ又其良人も死して今ハたゝ少あき身とあるたゝもども自かゝ働きて一家の活計を立て世間の人へ對して面目を失ひしこゝゝ十年たゝもの其間ハ斯くゝろゝく月日を送りしゝ或夜その鄰の家ゝ火を出して忽ち「ぐつと」が住居ゝ及び大急の騒ぎゝて取るものもゝ取あへず窓ゝ飛出でゝ道ゝ其機ゝ手足を挫きたるゝ由ゝ醫師の療治を受て右の腕を切て右の足も全く叶はざる者とあるゝ

「ぐつと」ハこの災難ゝ罹てしゝ友達の深切ゝ任せて一時ハ其約ゝとあるしゝども自かゝ思ひけるハ私ゝ人の扶助を願ふものハ世上ゝ其類少あかゝぜさるをバ今斯る扶助を受て友達の約ゝとあるんゝ公ゝ設けたる貧院ゝ入りて世上一般の救を頼むこゝを本意あるを不羈獨立の意を決して貧院ゝ這入たり世間並の人あるをバ貧院あゝ入ることハ不外聞ゝ思ふ爲き苦ふるゝ「ぐつと」ゝ於てハ然らぬ人の身の賤しきを賤しかゝざるとハその行狀の良否ゝ由るものあるとの教を心の底ゝ銘して信ずる所固けきバ

貧院ふどの名ハ驚きもせぢ亦こそ恥とも思はぢ院ハ入ー後ハ唯一心ハ天の恵を拜て信心を專とし不自由を堪忍して いつも心を悦をしめ少年を教へ老人を憐を朋輩の者へ朝夕心得とあるべき事を談話して皆これを悦をざる者ハ世の人のこの貧院へ見物の為ハ来る者もをつと様子を見て其身分の賤しかるざるを知て自分一人の決断ハてざと貧院ハ入てしの心の程ハ感心せざる者ハふりしと也

蝦蟆の仲間ハ君を立る事　寓言

蝦蟆の仲間ハ共和政事の法を立てしが何も満足ざるこ

とを知らぢ早くも心変して自主自由の風を厭ひ何とぞして其政事の様を變んものをと思ひ乃ち雷の神ある木星を念ど我仲間ハ王たる者を下し給へと祈をけり木星も兼て慈悲深き神ある成丈け蝦蟆のためハ災害の少ぢんこと思ひ一片の木の切をを天より送りこれを汝等の王ハ定むべしとの命ハ由り蝦蟆等ハ大ハ悦びこの木の切をを王の位ハ奉りて頻りハこと成敬ひ尊びしが漸くこうらハ慣を王の心意の温和ハるを成ようたことハして最早敬ふ心もなく次第ハ近づき遂ハこと成悔り斯る者ハ我仲間の王ハ為し置き難しとて更ハ又木星ハ請

ひ別ふ王たる者を下し給へと願ひけもバ木星もこの度ハ怒り給ひきゝバして五位鷺を遣はしたり五位鷺ハ早たの蝦蟆ふ君とし臨き位ふ即きし其日より配下の者を捕へてこゝ成喰ひ大ふ國中を悩ましけもバ蝦蟆の難渋ハ以前ふ百陪しとハ思の外のことありとして又木星ふ訴へてこの度の王をも取替たまへと歎願したもども木星ハ最早ふの歎願の次弟を聞入もまして云く汝等が訴る所の難題ハもと汝等が無分別ふて自ら招きし禍ふもバ自ら堪忍まるより他ふ方便ハなしと

第十三章倹約の事

人ハ衣食住の物を得るが為ふ働くハ勿論ふもども唯働くのミふてハいまだ人間の事を終りとせず既ふ働きて衣食住の品物を得るゝにハ又これを用るふ當て心得違ハるべからず人或ハ力を盡して働くと雖ども無益ふ錢を費もまと甚ざしけもバ唯不精をもるふハ勝るとハいふべからずふて他ようにことハふし或ハ又人並の骨折をも為さず得る所ハ少ふくして費を所ハ慢ふる者ハ斯る人物ハ忽ち其身代を破り憐むべき有様ふ陥ることと疑もハなきを故ふ我身代をよく保たんとする者ハ得る所のものをおとくふ用ひて盡くこゝ成費をべからず追々年の積りふ從ひ身体も衰

へ仕事をすることも叶はざるに至るべく或ハ病氣其外不時の災難もあるべくもバ其時に臨み十分に不自由なきやう多少の貯を為し置くべし假令ひとの働かで得る所のものハ少くとも少なきハ少なきに準じて少しづゝの用意をバせざる可らず

假令ひ我身ハ富むと雖ども金を費やかハ其費やすべき事柄の良否に心を用ひざるべからず愚なる遊ぶ金を用ひ浪費を慰む錢を費やハ徒に金錢を海へ棄るよりも尚おそるべし

動ずして其以前に力を盡したる骨折ハ我身に用を為さず世界の為にも益を為さず空しく水の泡に等しきのみ又人の喰ふべき品物用ゐべき道具なども自分に不用なりとて棄これを毀つべからず何品によらず餘るものハ譯もなくこれを費やすべし難渋なる者へ與ふるも人の本意なれば必ず心得違ひなるべからず

ⓘ蟻と蠢蠢の事　寓言

秋過ぎ冬もすでに来り蟻の仲間ハ忙しく雨露にさらせる穀物を住居の傍に取入れて小山の如く積貯へ寒さの用意專一と共に働く其折柄夏の終に生殘りし一疋の蠢蠢飢寒に堪へ兼ね半死半生の樣にて蟻の家に来て見苦しくも腰を屈めて君が家に貯へたる麥にても大麥にても唯一粒を

惠てこの難渋を救ひ給へと請願ひしに一疋の蟻こまと詰問ひけるハ蔡ハ夏の間に辛抱して兵糧を貯へしに君に於てハ更に其用意もなくして長き夏中の其間ハ何事に日を送らをしやとの尋に蟲螽も赤面しきとバ其事ある夏の間ハ唯面白く月日を送て朝に露を飲ミ夕にハ月に歌ひ花に戯れ草に舞ひ冬の来らんとハ思ひも考へざりしかりと答へバ蟻の云く君の言葉を聞てハ蔡にハ別に云ふべきこともあらじ誰にも問ふと夏の間に歌舞飲食をする者ハ冬に至て餓死ぬべき筈なりと

(ろ)英雄の人倹約をする事

身分重き英雄豪傑の君にても倹約せしこそ名高きものなれ往古歴山王ハ粗服を着しその様に身の家来に異なるを又羅馬合衆政治の大統領「かとう」ハ上着一枚を調ふるに百文英の一文ハ一「ドル」を一両文と定め一文一分余に当る人に告て云く不用の物を買へバ其價ハ何程にても高きものなりと又羅馬の帝「おふくたつ」ハ九そ其時代の世界中を押領せし君なれども其着せる衣服ハ皇后と姫君とに縫ひしものなり其夜具蒲團杯も平人の用ひる品に異なる

(ち)又日耳曼の帝「ろどるふ」ハ常に粗服を着て見苦しきまでの様なり或時「むん」を焼く店に立寄て火にあたりけるに店

の女こを見知らを賤しき男ありとて犬の兎より追拂ひしことはりと以ふ又「ろとるふ」の末孫第五世「ちやはもを」も日耳曼の帝ふて西班牙王の位をも兼ね威名燿く君ありし常ふ粗服を著せり又佛蘭西の王第十一世「ろいを」も「ちやはもを」同様ふて衣服ふ奢てしことふし其暮向の書類を見るふ古き下著の袖を取替るため二「おるるとんぐ」「ぐ」ハ十三文余当るふて木綿の切を買ひ三文半ふて長履を塗る紬を買ひしと以ふことはり右ハ何をも世ふ名高き國王ふて其一身の為ふ費を所ハ斯く儉約ふをもとも國の為とはもハ幾千萬の大金を費をも憚ることふりてし英雄ふり

㊐質素儉約ふる家内の事

子供たる者ハ何品ふてもよくこと紙始末をべきハ勿論ふもとも唯自分の為のみを思ふてハ自儘勝手の舉動ふ陥るゆゑふ人の為をも考へて物を始末ふ我所持の品を友達へ分ち與ふるハよろしことふもとも盗もふくこと紙打砕くハ甚ぞ宜しからを余嘗て或人の家ふ至てしふ其家風如何ふも儉約の法ふ叶ひぬもとも見苦しく賤しき趣ハ露だらをもはをを唯真實の儉約を守るゆゑふ少ふき紙以てうろうろとをることと他人の多き紙以て悦ぶふ異ふを其家風の一二箇条を擧てハんふ家の主人外より紙包

を持帰りバ長子ハ人の差圖を待たずして其包の紐を解き其紙を開こ共焼きもせず又引裂きもせず始末して貯置き少子ゞ獨樂ふど舞もそなて紐の入用ハ彼の貯の品を出してと共ふ與ふ弟等ハ既ふ獨樂の遊ふ倦き紐の始末をもせずして座中ふ取散し置けバ兄ハ又人の差圖を待たずこも共取片付て本の處ふ納め置くなどの風あり

⑫半両金の價の事

英國の人「ヒルたいん」年十三歳のゝ學校ふ寄宿せり性質おとなしき子供ふもぞ同塾の朋輩を見るふ何もも皆自分ゝ多く金をつかひ便利ある様ふもバこも共義ふ

く思ひ親父の許ふ手紙を贈て陽ふ何程の金子入用ありとハ云ども朋輩の書生ハ大抵一七日の間ふ半両づゝの金をこづかひふ用るとの次弟を述て遠廻しふ金の無心を云ひ遣しけ（原書ふ「ころおんん」と云ふ字を両と譯せ一）ハ我一両二朱余ふ当る親父ハ様々の子細ありて其子ふ金を贈るを好まざりとて又ゝ厳しく叱りてこを拒むも却て宜しからぬと思ひ乃ち返詞を認めて去も贈り其返詞の文面ハ一七日ふ半両の金を學校の書生ふ與へて余計の事ふ費さしむるより他の事ふ此金を用ゆバ大造ある益を為ゆ事しの道理を知らしむるの趣意ふ其文言左の如し

芋のよく出来る土地にてハ二俵の價半両あり八十斤入の俵ふきバ二俵合せて百六十斤の芋ひとき洗ひこ煮て煮るゝに棄たるところもひとぐけきぐも荒斤二斤半にて一人一日の食物ハ十分あり此割合にてきバ半両の金を以て一七日の間九人を養ふべし固より芋ばかりを食ふ用るハ養の粗末なる者にきどもこれに僅ばかりの塩を付或ハ「だた」を取たる牛の乳の残を汁をくて平日の食に用るハ田舎に珍らしからぬことにて斯る難波者ハ幾千萬人もいるべし

然ゝ家の近辺なる小屋に住へる者共へ一七日の間に一度六文の「ぜん」を一個づゝ與へにバ難有こと受け其子供等の為にハ大造なる馳走をこと悦ぶべしもバ今半両の金にきバ一七日毎に五軒の難波者へ幸福を戴かしむべし六十文を以て一両と定む

田舎にて大勢の家内の住居せるに屋ハ一年の家賃大抵四十匁るをんぐより多かるもさもバ今一七日に半両づゝの金にきハ一年の間三軒の家賃を拂ひ上に家を修復して尚にきるべし

田舎の村にある女師匠の塾にて學問をるにハ其費一七日に二文より多かるもさもバ今半両の金にきハ一七日の

間十五人の子供ハ素讀の稽古をせしめ或ハ十五人の女の子ハ縫物の稽古をせしむべし右ハ必ず田舍ハ限るまじけれども都會の地ハても一季三箇月の間ハ一両の金を拂へバ讀み書き筆用の教を受け世間並の人物ハ成るべし故ハ一七日ハ半両の金にてバ三箇月の間六人の子供を教て其上ハ書物とも調へ與ふべきなり

右ハ一七日の間ハ半両の金を以て他人の為ハ大なる功德を為すべき仕方なり今又この金を以て汝が身の為ハ為すべき仕方を示すべし

余が知る如く汝ハ幼少の時より禽獸草木の彩色繪を悦べるこハ「ふちうらる・ひきさう」なる天然の物を調る學問の為ハハ用ふるものなり斯る繪入の書物ハ毎月出版ありて一七日ハ半両の金にてバ極上の品を買取ること容易かるべし

又一七日ハ半両づつの金を「ろんどん」の書林ハ入置ハバ一年の間ハ様々の書物を得て五年の月日を費しても讀むに程の冊數なるべし

右の次第ハて余ハ半両の金を愛て汝ハ與へざるハ汝ども前ハ云へる如く半両の金にてバ汝の為ハも又他人の為ハも夥多しく益を為すことなるものなり故ハ今汝

グ同塾朋輩の真似して菓子を喰ひ玩弄の物を買ふ故の為ふこの金をつゐひ費るハ余グ好まざる所あり

童蒙をしへ草巻の二終

東京市中之図

山口市之図

[illegible]